

～「わからんじゃ」と呼ばれないように～

新型コロナウイルス感染者が激減し、第6波の心配もさることながら、徐々に世の中が活気を取り戻しつつあるようです。繁華街も文字通り人の往来が頻繁になってきました。ただ油断大敵ですね。コロナウイルスは油断につけこんできます。

先日は熊本交響楽団の定期演奏会に行きました。コンサートホールで聴くオーケストラの演奏は、いつ聴いても「素晴らしい」の一言に尽きません。本物に接することの感動は、CDやDVDでは決して代用できないといつも思います。



さて入場時にパンフレットをいただくのですが、先日はそのパンフレットに一枚のプリントが挟んでありました。「お客様へのお願い」として、新型コロナウイルス対策についていくつか注意事項が記載されていました。それとは別にお願いコーナーが設けられており、そこには「演奏中はお静かに」（・おしゃべりは禁物です。・演奏中の座席の移動はご遠慮ください。・音の出やすいものにご注意ください。たとえばビニール袋やマジックテープ、プログラムやチラシをめくる音など。・せきやくしゃみはハンカチなどをあてて。）等々書かれてありました。よりよい演奏会にするために主催者の皆さんが配布されたのでしょう。

しかし、こうしたことをいちいち文章にして配布しなければならないということは、音楽会の聴衆者として当たり前のマナーを理解していない人が増えてきているということの表れなのだろうと思いました。ツイッターでは「演奏は素晴らしかった。しかし楽章毎に拍手する人がいた。マナーを分かっていない人が増えてきた。」という書き込みがありました。

今、学校では校則の見直し作業に入っています。校則とはとても微妙なもので、「きまり」（規則）と「マナー」の中間的な位置づけにあるように思います。わざわざ文章化しなくてもよさそうなことを文章化する。文章化した以上、それに反する行為や行動があった場合は指導しなくてはなりません。指導される方も指導する方も愉快ではありません。そのうち感情がこじれてきて「なぜダメなんですか。理由をはっきりしてください。」となります。一度こじれた感情は元に戻すのに多くの時間を要します。先生と生徒が感情をこじらした状態で過ごす時間はどちらにとってもきつく、苦しく、

空虚なものになります。

マナーがマナーとして機能するには、その集団にある程度の信頼関係と常識が必要だと思えます。保護者の皆様のご家庭にも、それぞれマナーがあると思えます。食事中はテレビを見ないとか、玄関で靴を脱いだら靴を並べるとか、お父さんお母さんが仕事で遅くなる時は子ども達が洗濯物を畳むとか、そんなマナーがあるはずですが。しかしそれをわざわざ文章化して壁に貼ってあるご家庭は皆無と思えます。それは家族だから分かってくれるだろうという信頼関係が成立しているからです。

学校もそうありたいと思えます。学校は生徒が日々知的に精神的に身体的に成長すべき場所です。国語、社会、理科・・・という文化遺産を学び、友達と共に成長すべき場所です。そのためにはある程度の緊張感が求められます。その緊張感を維持するために、髪型とか髪の色とか服装とか・・・細かく決めないでも、また「校則」として文章化しなくても生徒自らがその良し悪しを判断できるようになってほしいと思えます。学校目標「自律と協生」はそうやって実現していくのだと思えます。

先の演奏会の時、楽章毎に拍手をする人達に対してでしょうか、隣に座っていた高齢の紳士が「わからんじゃ。」と呟かれました。熊本弁で「わからずや」という意味です。私達も社会的マナーをよく心得て、他人様から「わからんじゃ」と呼ばれないようにしたいと思いました。

～【 栄光を讃えて 】～

11月21日(日)、熊本市南部総合スポーツセンターにて第29回熊本県中学生新人弓道大会が開催されました。この大会の団体の部において女子チーム(男澤由奈さん、西村留佳さん、宮崎晴さん)が優勝、また個人戦2年生の部において、西村留佳さん、準優勝。宮崎晴さん、第4位入賞。また1年生の部において、東香里奈さん、準優勝。清田莉花さん、第3位という輝かしい成績を残すことができました。

先輩方が築いた「日本一」の伝統をしつかり守って、日々一生懸命に練習している様子がうかがわれます。



「日本一」の部活であるという自信と誇りを忘れずに、鹿南中の部活全体をリードしてほしいと思えます。そして保護者、コーチ、先生方、チームメイト、クラスメイトへの感謝を忘れずにいてほしいと思えます。おめでとうございます！